

---

最後まで、幸せになってくださいっ！

鏡餅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最後くらい、幸せになってくださいっ！

### 【Nコード】

N2265U

### 【作者名】

鏡餅

### 【あらすじ】

死期が見えてしまう少年の物語。

もうすぐ死んでしまう、少女を見た時、少年はある行動に移します。

## 死期が分かる男の子

その日は、酷い雨が降っていた。

「ママっ ママっ！！ 今日だけは、出掛けないでっ」

「どうしたの？ 翔太。」

6才位の男の子が、その母親と思わしき人にしがみつकिながら泣き叫んでいる。

男の子は続けた。

「今日ねっ ママっ 死んじやうのっ 行っちゃだよおお」

女の人は眉を潜めた。

いつもと違う感じの我が子を不信に思ったようだが、男の子を引き離しながら女の人は言った。

「翔太のお願いでも、それは聞けないかな。 ママね、たーっいせつな会議があるの。 ごめんね。」

女の人は男の子を抱きしめ、家を出た。

「だめっ だめっ だめーっ ママっ 死んじやう…」

男の子は、泣きじゃくりながら玄関を飛び出した。  
その時だった。

『キキイイイイイ』

雨でスリッパした車が、女の人に勢い良く突っ込んでいった。

鈍い音がして、女の人体が宙に浮いた。

グシャッという音と共に、体がコンクリートに打ち付けられた。

一瞬の出来事だった。

「ママっ ママ!!」

女の方はピクリとも動かない。

「ママあぁっ」

男の子は泣き崩れた。

雨は容赦なく男の子と、女の方の亡きがらを濡らし続けた。

## 変な奴

「おい、 翔太って奴の噂知ってるか？」

「噂？」

「あいつ、人間が大っ嫌いらしい。」

「はっ？」

「翔太に触ろうとすると、凄い形相で睨むんだ、そして最後に…」

「最後に？」

「俺に、二度と近くなって。」

「えーっ」

「だから、あいつには、近くな。」

遠くから、そんな声が聞こえる。

教室の窓側の方の机に突っ伏しながら、俺は、俺について噂を聞いていた。

俺は、別に人が嫌いではない。

しかし、噂の言っていることは、全て嘘ではない。

俺は、産まれた時から人に触ると、その人がいつ死ぬのか分かる。

それなのに、死んでしまう人は、助けられない。

人と仲良くなれば、その人が死ぬ時、罪悪感が生まれる。

だから、俺は極力、誰とも話さないように、触らないように、と心掛けてきた。

だから、あんな噂が出来たのだろう。

ふと、窓の外を見た。

満開の桜が、グラウンドを囲んでいる。

今日から新学期つと、心を浮かせてきたが、もうそんな噂がたっているなんて。

今年も、去年と同じか。

心の中で、苦笑いをした。

さっきの噂をしていた奴らの声が、また聞こえてきた。

「おい、でもさあ　なんか訳ありかもよ。」

「訳あり？」

「隼人さっきさあ、翔太は人の事が太っ嫌い。と言ってたけど、そんな人、いないような気がする。」

「でも、あいつには、近かないほうがいいって。」

「うーん。ごめん　隼人のお願いでも…　今回は、曲げられない。ちょっと行ってくる。」

「おっおいつ　　啓っ！」

まさかの展開だった。

俺の噂を聞いてもなお、俺に近づこうとするなんて。

思わず俺は、突っ伏していた机から、顔をはなした。

見ると、一人の男子が俺の方に、歩いて来ていた。

少し崩してある、薄茶色のある髪型に、整っている顔。

地味過ぎず、派手過ぎず、クラスの人気者候補の様に、思えた。

と、そんな事を考えていると、その男子は既に、俺の目の前に来ていた。

「凄いっ ナイスタイミングっ 調度いい所で、起きたなっ！」

「別に、寝てなかったけど…」

俺は、いつもの調子で、その男子を睨みつけた。

そんな俺の調子を軽く受け流し、男子は続けた。

「そんな怖い顔すんなってっ。」

「…。」

「俺の名前は、笹川 啓 っていうんだ。 よろしくなっ。」

その、笹川という男子を睨みつけていたままの俺だったが、笹川はニコニコしながら話し続けた。



「お前の名前は？」

「…飯島 翔太。」

「よろしくね。翔太。」

まだ態度を変えない俺を見て、笹川は一層嬉しいそうに笑った。

そして、小声で呟いた。

「翔太なら、良いかも。」

笹川は、制服のポケットから、一枚の紙切れをだし、俺の目の前に置いた。

また、小声で笹川は言った。

「…待ってるから。」

そう言ったとたん、先程のような様子に戻して、爽やかに、笹川は言った。

「じゃあっ 翔太！ これから宜しくねっ！」

そして、スキップしながら、さっきの集団に戻って行った。

「何なんだ あいつ。」

俺は思わず、小声で呟いた。

窓から入ってくる風に、笹川が置いて行った紙切れがなびいていた。

## 紙切れの内容

今俺は、和菓子屋の前に立っている。

あの紙切れには、こう書いてあった。

『午後3時、手土産を持って、学校の前のバス停に集合！遅れるなよっ！』

自分でも、何故手土産を買おうとしているのか、分からない。

そんな一方的な約束、破ってしまえば良いものを。

多分、俺を動かしているのは、笹川に対しての好奇心だろう。

俺にあんな態度をとった奴は初めてだった。

行くだけ行ってみよう。

そう考えた俺は、和菓子屋に入り、ドラ焼きを2個買って店をでた。

3時まで、後10分。

俺は、急ぎ足で学校へ向かった。

バス停に着くと、笹川は小さな花束を右手に、ベンチに座りながら待っていた。

笹川は、俺の姿を見るなりに、勢いよく立った。

そして、早口に話し始めた。

「翔太っ！ よかった。もう少しで遅れる所だったんだ！ ほらっ！」

そう言って、笹川から見た右側を指さした。

見ると、路線バスがすぐ傍まで近付いていた。

「ほらっ 乗って！ 乗って！」

俺は言われるがままにバスに乗ってしまった。

「おいっ 一体何のつもりだっ。」

俺は、思わず怒鳴った。

が、ここはバスの中。

一気に周囲の注目を浴びてしまった。

肝心の笹川も、人差し指を立て口の前にかざし、静かにの、ポーズ

をとりながら、焦っていた。

むかついたが、今は静かにするしかなかった。

一体、何処に向かっているのだろう。

## 演技

バスで約15分走った所にある紅葉病院。

この近くでも有名な総合病院だ。

そんな病院の前に俺はいる。

「よしっ！ 着いた。 翔太、俺に着いて来て！」

笹川がそう言い、歩きだした。

「待てよっ。」

俺は、笹川を大声で呼び止めた。

すると笹川は不思議そうな顔をして振り返った。

「何だ？」

「何だ？ じゃねーよっ どういう事だ！ 説明しろよっ。」

苛立ちのこもった俺の声を聞いた笹川は、はっとした様に目を見開いた。

「あれっ？ まだ、説明してなかったって？」

「してない。」

「ごめん、ごめん。そうか、バス停で説明出来なかったのか。」

そう言うとき笹川は、急に真剣な顔になって、話し始めた。

「会って欲しいって言うか、友達になって欲しい人が、この病院に入院してるんだ。」

「はっ？」

会って欲しい人？

成る程、これは見舞いなのか。だから俺に手土産を持って来いなんて言ったのか。

でも、

「何で、俺？」

笹川は、人気者に部類される方だと思う。俺じゃなくても、他にも友達はいるはずだ。

笹川は何気ないといった表情で答えた。

「自慢出来る友達を、連れて来いって言われたからだ。」

「自慢出来る…？」

「翔太ってさあ、一度決めた事は絶対に曲げなさそうだって、思った。良く言えば、信念強いかな？」

笹川はニコニコしながらそう答えた。

「お前と、いる奴らは？」

俺は思わずそう尋ねてしまった。

そしたら笹川は、ニコニコしたまま、少し悲しそうに答えた。

「学校にいる俺の友達は、本当の俺の友達じゃないから。」

「はっ？」

俺は、声が裏がえった。

「演技の俺と、皆は友達なんだ。」

「……」

意味が分からない。

「まあっ そんな事より！」

笹川はいきなり声のトーンを高めて言った。

「翔太！ お見舞い行ってくれるよねえっ？」

正直、迷ってる。

行くか。行かないか。ここまで来てしまったのだし、会うだけあつてみようか…。

「行ってやるよ。」



気付いたら、俺はそう答えていた。

「本当っ！ サンキュー 翔太っ！！」

笹川の純粹過ぎる笑い顔を見て、思わずたじろいだ。

「さあっ！ 行こう。」

「おいっ」

再び歩きだした笹川を、また停めた。

「何？」

俺は、ここまでの話で一番疑問に思ってた事を尋ねた。

「俺と、お前って、友達なのか？」

「……」

「……」

「えっ！ 友達じゃないのっ？」

「はあっ？」

間拔けな声をあげてしまった。

「…まあまあっ 細かい事は気にしない！」

そう言って笹川はスキップをしながら病院へ向かって言った。

「おっおいっ 待てよ。」俺は焦って笹川の後を追った。

……まったく。今日は、笹川とか言う奴のペースにのせられてばかりだ。

きつと、俺も新学期ということで、気持ちが高ぶっていたのだろう。

嫌に、空が青く感じた。

なんか、むかつく。

## 初めての出来事

俺達は、紅葉病院に入った後、エレベーターを使い五階まで上がった。

「この階にお前の友達が入院してるのか？」

「ああ。」

少し笹川の顔が、緊張のせいで赤くなってる様に思えた。

小さな花束を大切そうに抱えて歩いている。

笹川が、いきなり停まった。

「ここだよ。」

504号室。

：なんだか、俺まで緊張してきた。

笹川は、手慣れた手つきでドアを開いた。

「よおっ 杏里っ！ ちゃんと、友達連れて来たぜっ！」

杏里？

俺は、病室のベッドの上を見た。

そこには、俺と同じ位の歳の女子が、上半身を起こして座っていた。

少し癖のある茶色の髪に、くりくりとした、大きな目。真っ白の肌と、ほっぺと口の桃色。

まるで、天使の様だ。

頭が、ぼーっとしてきた。息が苦しい。でも、夢を見ている様な感覚だ。

「これが俺の友達の、翔太。翔太！自己紹介宜しくっ！て、翔太？　おーい？　翔太？」

「……」

「おーい？」

はっ！　笹川の声で、我に返った。

「ほらっ　自己紹介！」

「おっおう　俺の名前は飯島　翔太。　よっ宜しく」

焦りすぎて、声が裏返りまくった。ちらっと、彼女を見ると、くすくすと、笑っていた。

彼女は笑いながら言った。

「そんなに緊張しないで！あたしの名前は、松下 杏里。宜しくっ！」

「おっおう」

「それと、翔太って呼んでも言い？あたしのことも、杏里って呼んで！」

「ああ。」

大分緊張が解れてきた。少しだが、余裕もでてきた。

「えーっ！翔太っ！俺の事も、笹川 じゃなくて、啓 って呼んで！」

「はああ？」

「：お前は、なんか気色悪いからなあ。」

俺が笑いながら答えると、笹川は、少し膨れながら言った。

「ひでーっ なあ杏里」

「うーん 啓は、そう言われても、しょうがないんじゃない？」

笹川が慌てながら言った。

「まじかつ！ てか、お前らグルかつ?!」

「あはははっ」

気付いたら、俺は二人と共に笑っていた。  
なんだか、不思議な感覚だ。

それから、色んな話を話した。  
たわいもない世間話だったが、なんだかとっても、楽しかった。

いつの間にか、空が真っ赤に染まっていた。

「あーっ そろそろ帰るかっ」

笹川が切り出した。

「そうだな。」

俺も賛成した。

「なあ…」

俺は、二人に声をかけた。

「何？」

「どうしたー？」

笹川と杏里がばらばらに答えた。

俺は戸惑いながら、続けた。

「また、ここに来てもいいか？」

「……………」

笹川と杏里は、顔を見合わせて、笑った。

「良いに決まってるじゃん。」

杏里が手を軽く振りながら答える。

「また、来ようなっ！」

笹川が、ニコニコ答える。

自分が、こうやって人て話してるのが、何だか、とても不思議だった。

でも、無性に嬉しかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2265u/>

---

最後まで、幸せになってくださいっ！

2011年10月9日00時14分発行